

平成 30 年度 横須賀美術館運営評価委員会

●横須賀美術館運営評価委員会（平成 30 年度第 1 回）

日時：平成 30 年（2018 年）7 月 10 日（火）14 時～16 時

場所：横須賀美術館 会議室

1 出席者

委員会	委員長	小林 照夫	関東学院大学名誉教授
	委員（委員長職務代理者）		
		菊池 匡文	横須賀商工会議所専務理事
	委員	柏木 智雄	横浜美術館副館長
	委員	草川 晴夫	観音崎京急ホテル取締役社長
	委員	丹治 美穂子	横須賀市立鶴久保小学校校長
	委員	祓川 由美	市民委員
館長	教育総務部長		阪元 美幸
事務局	美術館運営課長		菅野 智
	美術館運営課広報係長		相良 泉
	美術館運営課管理運営係長		高橋 博之
	美術館運営課（学芸員主査）		工藤 香澄
	美術館運営課（学芸員主査）		富田 康子
	美術館運営課（管理運営係）		秋山 卓雄
	美術館運営課（学芸員）		日野原清水
	美術館運営課（学芸員）		杳沢 耕介
	美術館運営課（管理運営係）		鈴木 渚

欠席者

委員会	委員	本間 康代	市民委員
-----	----	-------	------

2. 議事

- (1) 平成 29 年度の運営評価について
- (2) 平成 30 年度の事業計画書について

3. その他

- (1) 今後のスケジュールについて

会議録

【開会】

〔事務局・菅野課長〕：定刻になりましたので、「平成 30 年度 横須賀美術館運営評価委員会 第 1 回」を開会いたします。開会にあたりまして、横須賀美術館館長事務取扱、教育総務部長 阪元よりあいさつをさせていただきます。

〔阪元部長〕：教育総務部長、横須賀美術館長の阪元でございます。本日は、ご多忙の中、平成 30 年度 横須賀美術館 運営評価委員会 第 1 回にご出席いただき、ありがとうございます。本日の会議開催にあたり、委員の皆様にはお忙しい中、短期間で平成 29 年度事業に対する二次評価を行っていただき、重ねてお礼申し上げます。

本日、皆様に二次評価のご議論をいただき、平成 29 年度の評価が確定いたします。

皆様のご意見のひとつひとつを、今後の運営に生かし、さらに一層の努力や工夫を凝らし、美術館の目標でもある、「市民に親しまれる・愛される美術館」を目指し引き続き努力してまいります。それでは、本日もよろしく願いいたします。

〔事務局・菅野課長〕：ここで少しお時間を頂戴しまして、事務局職員の異動がありましたので、紹介をさせていただきます。市の人事異動により前課長の佐々木が文化振興課へ異動いたしました。私は新たに課長として異動してまいりました、菅野です。

また、今年度の新規採用で、新たに管理運営係に着任いたしました、鈴木です。

－（鈴木 自己紹介）－

進行を進めさせていただきます。本日は、本間委員より欠席の連絡をいただいております。次に、本日は傍聴の方が 1 名 いらしております。それでは、資料の確認をさせていただきます。

－（資料確認・略）－

以上が本日の資料です。不備等ございませんでしょうか。

それでは、小林委員長、議事の進行をお願いします。

【議事（1）平成 29 年度の運営評価について】

〔小林委員長〕：次第に沿って議事を進めさせていただきます。「議事（1）平成 29 年度の運営評価について」事務局は評価の進め方、報告書の体裁等について説明をお願いします。

〔事務局・菅野課長〕：資料 1 「平成 29 年度 評価報告書（二次評価まとめ）」ですが、皆様からお送りいただきました二次評価の結果を事務局でまとめたものです。この資料をもとに、後程ご議論をいただきたいと考えます。ご承知のとおり、①から⑧の目標があり、それぞれに「達成目標」と「実施目標」があり、16 の評価項目となっております。

次に、二次評価確定の進め方について、ご提案させていただきます。事務局からは、最初に①の目標について、一次評価及び委員から頂戴した二次評価の説明を簡潔に行います。委員の皆様には、委員会としての二次評価についてご議論いただき、評価を確定していただきます。以降、順次目標ごとに繰り返し、進めていきたいと考えます。

また、評価報告書の体裁ですが、昨年どおり、コメントは同様のご意見を1つにまとめ、すべて掲載をしたいと考えます。よろしければ、いままで通り、コメントの後にカッコ書きで記名をさせていただきたいと考えております。

[小林委員長]：進め方、評価報告書の体裁についてですが、いかがでしょうか。まず目標①から、事務局は説明をお願いします。

[事務局・相良]：資料1 「評価報告書 二次評価まとめ」及び、「評価報告書 一次評価」に基づき、目標ごとにご説明申し上げます。評価報告書（一次評価）の1頁をご覧ください。私からは、「I 美術を通じた交流を促進する」のうち、「①広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる」の一次評価について、説明させていただきます。

平成29年度は、達成目標の年間観覧者数100,000人に対し、実績は、118,370人となりました。達成率118%と目標を上回ったことからA評価といたしました。目標を上回った最大の要因は、企画展「ぼくとわたしとみんなの tupera tupera 絵本の世界展」の観覧者数が、目標を大きく上回る46,091人となったことです。観覧者数でいえば開館初年度「生きる展」に次ぐ2番目の観覧者数を、この開館10周年の節目に記録したことは、展覧会自体に強い集客力があつたということは当然ではありますが、これまで10年間、地道に築き上げてきた広報活動の成果の表れでもあると考えております。

また一方で、多くの委員からご指摘のあるとおり「美術でめぐる日本の海」展は73%「没後40年伊藤久三郎展」の69%など見込みを下回る展覧会が目立ちました。これらの展覧会につきましても限られた予算の中ではありますが、他の展覧会とほぼ同規模の広報活動を行っていることを考えますと、目標とする観覧者数の見込みが甘かったことは否めません。今後は開催時期や会期日数などを良く考慮して、各展覧会の観覧者見込みを算定するよういたします。

2頁をお開きください。実施目標の「様々な広報媒体の特性を生かして、効果的な広報活動を実施し、交流を促進する」ほか4件ですが、1次評価としましては、各目標についての評価を総合して検討した結果、いずれも目標を上回ったことからA評価としました。なお個々の実施目標の結果状況についてはこれから順にご説明いたします。

3頁をお開きください。実施目標の1番目「様々な広報媒体の特性を生かして、効果的な広報活動を実施し、交流を促進する」については、(1)訴求活動による集客促進をご覧ください。

説明の前に大変申し訳ございませんが訂正箇所がございます。運営評価報告書3頁の(1)3行目の情報掲載数が248件となっておりますが、251件が正しい数字でございます。修正のほどよろしくお願い申し上げます。

説明にもどりまして、3頁の表に記載のとおり新聞雑誌等への無料での情報掲載は251件と目標の220件を上回りました。またツイッターのフォロワー数は9,107人と前年度に比べ増加しています。

4頁をご覧ください。

実施目標の2番目「各種イベントを開催し、展覧会以外の要因での利用を増やす」については、(2) イベント開催など展覧会以外の要因で利用者を増やす取り組みの推進をご覧ください。

新規の企画も含め記載のとおりイベントを行っておりますが、平成29年度は、開館10周年記念を広くPRするためにコンサート、パネル展示、プレゼント企画などを広報イベントとして年間を通して行いました。

年間パスポートや前売券の販売状況は表に記載されているとおりです。

実施目標の3番目「外部連携を推進し、様々な機会と場所を捉えて、美術館の情報を発信する」については、4頁から5頁に記載されています。(3) 外部連携の推進をご覧ください。

記載のとおりカレーフェスティバルなどのイベントへの協賛、観音崎フェスタへのブース出展などの地域活動への参加などのほか、レストランアクアマレの食事券と観覧券をセットにしたふるさと納税の商品提供など、他部局や民間事業者、また近隣地域との連携などを積極的に進めました。また昨年7月より京浜急行電鉄との連携事業として「よこすか満喫切符」への参加をしており、年間で1,432人の来館者となりました。

5頁をご覧ください。実施目標の4番目「旅行会社などへの働きかけを通じて、団体集客を促進する」については、(4) 団体集客の推進をご覧ください。

平成29年度の団体観覧者数は、前年に比べ減少していますが、団体観覧として取り扱っていないため件数には反映していない20名以下の町内会、介護施設、学校といった小グループの観覧は増えており、全体としては横ばいの印象であると分析しております。今後も引き続き団体集客の推進に努めたいと考えています。

最後に実施目標の5番目「商業撮影の受入と誘致を推進し、美術館のイメージアップを図る」については、(5) 商業撮影の受入と誘致をご覧ください。

商業撮影につきましては、例年並みの数字で、目標としていた30件を達成しました。

主なものとしては、女性向けファッション誌を中心に、集英社のエクラ、小学館のオッジなど、その他、ダンサー・振付家・演出家の勅使河原三郎氏を起用したオリンパスの社内向けコンセプト画像や高島屋、伊勢丹のウェブカタログ画像など、いずれも美術館名のクレジット入りで掲載されており、横須賀美術館の認知度向上につながったと考えています。私からの説明は以上です。

[小林委員長]：何か今の説明でご質問がありましたらどうぞ。よろしいですか。それでは評価につきまして検討していきたいと思えます。一次評価はAです。その達成目標Aということに対していくつかご意見があるのですが、まず丹治委員の方からコメントがありますので、Sになった理由を聞ききましようか。

〔丹治委員〕：今説明にあったとおり達成率として目標値に及ばなかった企画展がいくつかありますが、純粋に設定した目標値を大きく達成していることについては高く評価したいと思いS評価をつけさせていただきました。ほかの委員の皆さまから目標の設定値を変えることも今後必要かというご意見もありますが、まずは達成目標 10 万人として昨年度やってきているのでそこを大きく超えたことを純粋に評価したいと思っています。

〔小林委員長〕：今そういう形でSという評価を付けていただいたわけですが、菊池委員から 10 周年事業の影響をどのように評価、検証しているのかという非常に本質的な問題が提起されていますので、少し説明していただきたいのですが。

〔菊池委員〕：私も非常に健闘して 11 万 8 千人という 10 万人という目標に対して大幅に上回ったかたちで、S 評価にする基準というものを考えなければいけない部分と、ここに記載しましたようにやはり動機づけとしてこの美術館が 10 周年を迎えるということと 29 年度の計画の中でも、いわゆる外に対して、それから中で 10 年間美術館を運営してきたスタッフにとっても節目として大事にしなければいけないという話があったと思います。

そうした時にこの 11 万 8 千人という数字の中にその中の方々が 10 周年というひとつの大きな節目がどう影響したかと検証したり、手ごたえを感じてないと次の 10 年に向かってのステップアップにならないと思っています。

確かにあの 10 周年の記念のコンサートを記念として実施しているのは良いのですが、これがどのように 11 万 8 千人に影響しているのか、そのようなことがわからないと、いわゆる通常年度とこの節目の年度とどれだけ影響力があるのかというのはそれを検証評価しなければいけないと思っています。

A 評価にあえてしたのは、私も S でも良いと思っていますのですが、その辺をもっとこの中で表していただき、検証しながらこの数字を見ていることであれば、一次評価はおそらく自身の評価なので謙遜して評価されていると思うので、S で評価しても良いかと思っています。そこが表れていないので今この場でお話をいただけるのであれば聞きたいというのがこの疑問符なのです。

〔小林委員長〕：この件は事務局の方にお伺いしますが、いまのご意見に対して何かございますか。10 年という一つの節目をどうとらえてそれを位置付けしたのかと。

〔事務局・相良〕：私からは広報イベントという面からの答えになってしまいますが、10 周年事業ということで、単発のイベントとしてはコンサートなど行いましたが、予算的にも小規模なものでありましたので、こちらのイベントが直接的な効果に繋がったということは言い難いところではあります。10 周年期間中に、広報紙や市のホームページ、タウン紙、新聞、ケーブルテレビなど、イベントを開催することによりまして多くの媒体で取り上げられたこと、またこれを機会にHPやSNSで多くの発信する機会が出来

ましたので、結果として 11 万という多くの観覧者数を達成したことに關しては一定の効果があつたと考えています。

〔菊池委員〕：わかりました。それはお聞きしてあとは皆さんの評価ですね。

〔小林委員長〕：草川委員から数値で評価できる目標は段階を設けて評価しても良いのではないかというご意見をいただいています、ご説明願いたいのですが。

〔草川委員〕：達成目標 10 万人ということでやられているのですが、どこまで観覧者数が増えればこれが S になるのか、初年度を除いて過去最高という、私自身もこれは S でよろしいかと思うのですが、この基準が明確でないもので 10 万人を超えたはいいが、どこまでいけば S になるのか、このような基準が明確にあればという気がしまして書かせていただきました。自分も S で十分な成果ではないか思います。

〔小林委員長〕：その他に何かご意見ございますか。ご指摘いただいたそれぞれは大変重要な点です。横須賀美術館は 10 万人でずっと長いこと目標を立ててはいるのですが、数字のありかた、位置付けとういうところにご意見ありましたので、ここでは達成目標は小林も S を付けていますけど、全体としてこのまま一次評価どおり、A ということでよろしいでしょうか。二次評価はいかがですか。

〔柏木委員〕：菊池委員、草川委員からご指摘がありましたが、数値目標がたてられているものについては S 評価というものがすぐれた成果をあげているという評価項目基準があります。数値目標が立てられているものについては S と評価することについては自己評価の段階でも二次評価の段階でも例えば目標の 120% を達成していれば S にしようとかという共通の認識があつたほうが評価する側は評価しやすいと思います。ここで A と S、限りなくみなさん S に近いと思っている。評価においてはなるべく高いところに引きあげてあげたいと思っているのですが、この数値の基準がきわめて個々人の心的なものまかされているということがあつて、こういうばらついた評価になってしまうだろうと思うので、ここは改善の余地があると思います。

〔小林委員長〕：私はむしろ逆にずっと 10 万人目標という大きな目標があつて前年度はかなり落ち込んで 29 年度には観覧者数が 1 万人増えたことは、努力が施されたのかなと思います。そのような意味で、10 万人目標で 10 万人に行き着けばその評価どおり A ということなのですが、その間の 1 年の反省を踏まえて、29 年度は観覧者数が 1 万人増加したことを評価しました。

まだ数値としての形は、皆さんがご指摘になつたことはでていませんので、そのような意味で、今回に限り二次評価は事務局で査定されたように、委員会としても A と評価させていただくということでよろしいですか。

(異議なし)

〔小林委員長〕：実施目標に関しては、本間委員と私だけが違うところにあるのですが、私は28年度と比較して1万人以上観覧者数が増えたということプラスとして評価した結果Sとしましたが、県央部と県東部の割合状況をどのように捉えているのかというエリアの問題ですが、参考資料等をみると横須賀の人が意外と伸びていないのですね。そのようなことも踏まえて、菊池委員から書かれた理由についてお話いただけますか。

〔菊池委員〕：結構この辺は重要なことだと思っています。いわば商圈というか、この美術館の認知度がどこまで広まっているのかとか色々な要素があると思うのです。県央道の関係とか諸々アクセスの仕方というのが出てくるのではないのかと。これもパブリシティの効果もでているのかと。市内だけでなくおそらく県外も行われていますね。埼玉だとか東急ですとか。

〔事務局・相良〕：交通広告としては京王線とか東急線とか、パブリシティということで例えば埼玉県とか千葉県FM放送局とかにチラシを送るなどしてしまして県外にもPRしています。

〔菊池委員〕：実はふたつとも私は疑問符になっているのです。この辺りがすごく重要ではないかと思っているのです。このような形で実際に市外の割合が全体的に増加するということが何に起因しているという部分の中で共有しておかないと。もっと検証された方がいいのかと思って、このような疑問符をつけたのです。我々には分からないのですね。何が原因で県東部、県央部が増えたり、例えばリピーターが増えたり、結構リピーターも増えているのではないかと思うのです。割合もですね。

〔事務局・相良〕：県東部につきましては毎年継続しています。京急線、東急線の広告の影響がかなり強く反映していると思います。県央部の増加に関しては昨年、一昨年とターミナルである横浜駅でデジタルサイネージを一部実施したり、限定的ではありますが行っておりますのでそういった面も影響しているのではないかと考えております。

〔菊池委員〕：そのようなことを書いておいていただくと理由がよく分かります。そのような効果がでてきているのだということであればもう少し明確に評価ができるかなと思っています。説明を受けてよくやっているとは思いますが、どうしても評価の時点で把握できなかったことがありますので、そのようなところを含めて一次評価と同じ評価にしました。

〔小林委員長〕 来館者の割合としては、最近市外の割合が高く、オープンした年は非常に市内の割合は高かったのが、ずいぶん減少してきている。昨年よりは少し来館者の数は増えていますが、横須賀市民にとって「横須賀美術館とは」という問題というのは、

どのような形で数字の中に反映するのでしょうか。

〔事務局・相良〕：開館当初は美術館が新しくできたということで市民の方も目新しさでたくさん来館され当然市民の割合は高かった。委員のおっしゃるとおり 10 年たち、ひととおり市民の方が観覧されたということはあるので市民の方に 2 度 3 度足を運んでいただければと考えています。

〔小林委員長〕 自治会の広報の看板などみても美術館のポスターが貼られたりして、かなり最近いろんな形で P R なされていますね。

〔事務局・相良〕：広報は行っております。

〔小林委員長〕 どの広報板をみても、美術館の催しについてのポスターが貼られていて、非常に P R されているという感じはしています。

他に何かご意見ありますでしょうか。ここで評価を書いているのは、非常に取り組みが積極的に行われていて A にふさわしいと書かれていまして、全体的にみると一次評価に対しても的確に評価もされているということで、二次評価も A ということでよろしいですか。

(異議なし)

〔小林委員長〕：②の「市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。」について説明をお願いします。

〔事務局・沓沢〕：一次評価書の 7 頁をご覧ください。「②市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。」について、説明します。

達成目標は、「市民ボランティア協働事業への参加者数延べ 2,000 人」です。29 年度の延べ参加者数は 2,693 人となり、目標を大きく上回りましたので、一次評価を「S」といたしました。小林委員長からいただいたコメントで、平成 28 年度並みの数値ではないか、とのご趣旨がありましたが、平成 28 年度はギャラリートークボランティア、小学校鑑賞会ボランティアについて新人を受け入れ、研修を行ったり、イベントを例年より多い 4 回実施したり、参加人数が多くなる要素がありました。いま評価の対象となっている 29 年度では、それらの要素がなかったにもかかわらず、前年度並みの数値となったことは特別のことであると認識しております。また、本間委員からのご質問につきまして、29 年度にボランティアとして活動した方の実際の人数は 80 名を数えました。イベントやギャラリートークに参加する一般の方につきましては、延べ人数以外での把握は困難であると考えております。

次に 8 頁、実施目標でございます。実施目標は「市民が美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる。」「市民ボランティアが、やりがいをもっていきいきと活動できる場を提供する。」の 2 点です。一次評価は A としました。

各分野の活動内容につきましては、評価書に書き記しました通りです。そのなかで、開館 10 周年を迎えた 29 年度に特に実施したこととして、まず、ギャラリートークボランティアについては、第 2 期所蔵品展において、「特集：ボランティアが選んだ朝井閑右衛門」を開催いたしました。ギャラリートークボランティアが、一人一点朝井閑右衛門の作品を選び、それに解説をつけて展示するという取り組みを通して、所蔵品展にますます親しみを持ち、ギャラリートークへの意欲が湧くことを期待いたしました。来館者にとりましても、学芸員とは異なる解説が新鮮だったようです。また、この取り組みによって、ギャラリートークボランティアの存在を広く周知できたのではないかと考えております。

また、プロジェクトボランティアにつきまして、ゴールデンウィークのイベントでは、ボランティア結成 10 周年を記念して、10 種類の活動を一度に楽しめるイベントを企画いたしました。これまでの経験を最大限に生かし、もりだくさんの内容であったため、幅広い世代が楽しめるイベントとなっております。②についての説明は以上です。

[小林委員長]：説明いただいた点について、なにかご意見ありましたらどうぞ。あるいはうかがいたい点がありましたらどうぞ。いかがですか、説明に関してはよろしいでしょうか。

まず達成目標ですけれども、S 評価が 5 名となっております。柏木委員からコメントが出ていますので、お話いただけますか。

[柏木委員]：最初の項目と同じで、数値目標が立っているものを、A とするのか S とするのか、非常に判断が迷うところがあるので。そこは何か、S にする基準を設けられたほうがいいように思います。

私が S としたのは、二か年続けて 2,600 人以上という、数値目標に対して大きく数値を上回るということがあったので、S 評価としました。ここ数年の推移をみて、目標数値についても検証してみるということが必要ではないかと思いました。

[小林委員長]：草川委員、いかがでしょう。

[草川委員]：私も同じで、①と同じようなかたちで、数値目標があるのであれば、段階を踏んでいただきたいことと、あと一次評価が S ということでしたので、そのようなことをかんがみて、私自身も S とさせていただきます。達成目標から、ある程度のパーセンテージ、30%以上上回っていましたので、S でも良いかと思いました。

[小林委員長]：丹治委員いかがでしょうか。

[丹治委員]：私も同じです。いま事務局から説明があったように、小学生美術鑑賞会ボランティア等では、新規募集を行っていないことや、みんなのアトリエでも、申し出があったにもかかわらず、お断りしたという状況もありながら、この 2,693 人ということなので。ボランティアは実人数が先ほど 80 名とお聞きしましたがけれども、市民のボランティ

ア活動への参加が非常に定着してきており、S というように評価できると判断しました。

[小林委員長]：祓川委員、コメント欄に記載はありませんが、ご意見がありましたらお願いします。

[祓川委員]：私事ですけれど、横須賀美術館のボランティアを3年以上行っています。だいたい平均月に2、3回はこちらの美術館に足を運んでおります。当然、学芸員の方たちとの交流もたくさんあります。興味あるイベントには、できるだけ参加させていただくようにしています。職員の方たちのお仕事している様子を拝見する機会もすごく多くて、本当にみなさん一生懸命やっていたらっしゃるし、市民の方たちに喜んでいただくにはどうしたらいいか、という、中で活動しているところを目にする機会がとても多いのです。私の場合、初めてこういう評価に参加させていただき、数値目標とかというのは少しよくわからないのですが、いままでこちらに3年以上通わせていただいた中で、みなさんがお仕事をしているようすを見て、ご自分たちで一次評価をされているのなら、一次評価をそのまま信頼させていただいて、自分の二次評価にさせていただきました。数字ではなく、いつも通っている雰囲気、信頼しておりますので今回何もコメントを書いておりません。これは一次評価を信頼するというかたちで、すべて、私の二次評価にさせていただく、というのと、それから、過去に一回この話し合いで、みなさまのやりとりをうかがって、送っていただいた参考資料ですか、これも読ませていただいて、あまり違和感を感じなかったので、このようにさせていただきました。今、みなさん数字のことでいろいろおっしゃっていて、勉強になります。このまま拝聴させていただきたいと思います。

[小林委員長]：評価が悪いのは私だけです。読ませていただきますが、「ボランティアの参加人数の目標 2,000 人を上回っているということで、S 評価になっている。しかし、その数字が昨年度の数字と比べてどうなのか。また、美術館が課題としている方向性との関連でのボランティアの強化が実質的に図られているのか」。つまり、それぞれの年度に美術館の目標を立てていて、それをさらに強化する意味で、ボランティアの役割とか位置づけとかが出てくるわけですけれども、ボランティア強化が、実際に課題とともに連動したかたちで図られている、そういう問題はどうかということ、単なる数だけで評価せず A にしてしまった部分というのがあるのです。目標通り充足されているととらえてよいのでしょうか。

[事務局・沓沢]：横須賀美術館でのボランティア活動というのは、美術館でやっていることのサポートをしていただくという部分はもちろんありますが、基本的にはボランティアさんご自身の自主性を根拠として進めています。それで、年度ごとの美術館の企画によって、なにか方針を変えているということではなく、継続的な活動なのではないか、と認識しております。

[小林委員長]：わかりました。そのように学芸員側でとらえているのであれば、よろしい

と思います。全体的に委員の皆さんのお話を伺って、二次評価Sということによろしいですか。

(異議なし)

[小林委員長]：一次評価同様、二次評価についてもSとします。

次に実施目標ですが、これについてはいかがでしょうか。菊池委員がSをつけておりません。少し説明をお願いします。

[菊池委員]：数字の方は申すこともなく、コメントもなくSにさせていただいて、先ほど委員長もおっしゃられましたように、ボランティアの数が多ければ多いほど良いということでもないですし、やはり参加してくれる方々、メニューに参加してくれる来館者の方々の満足度と、ボランティアとしてサービスを提供していただける方々の満足度と、美術館の学芸員の方々の満足度がすべて一致していないと、数だけではなかなか難しいのではないかと思います。そんなバランスのなかで、この2,700人近い数字というのは。前にも柏木委員もおっしゃっていたように、例年ボランティア活動については、この美術館に対する評価はけっこう高かったと思います。ボランティア活動は私もこれが限界ではないだろうかという部分を非常に評価させていただいて、今年も前年と同じ形だったのですけれども、10周年という動機づけを考えながら、前年とは違ったメニューを提供しながら、ボランティアとの良い関係のもとに展開をされたのだと思います。例年通り同じようなことをして、結果こうなったということではない点を評価して、私はSとしています。

[小林委員長]：柏木委員いかがですか。

[柏木委員]：例年申し上げていますが、ボランティアに参加される方々は、みなさんそれぞれ密度の違うモチベーションをもっていらっしゃるので、そういう方々の自主性を重んじながら、ボランティア活動を組織していくということに関しては、この横須賀美術館の職員の体制のなかでは、精一杯やっているというところだろうと思います。

一次評価の理由として書かれていますけれども、先ほど事務局の沓沢さんからもお話がいくつかありましたが、ギャラリートークボランティアの活動にみられるような、参加者の自主性を重んじるような、事業の組み立てはすごく評価できて、それが数値的な部分にも出てきている、現象として出てきているのではないかと、という私自身の判断でSといたしました。

[小林委員長]：その他、何かご意見ございませんか。ここで菊池委員、柏木委員のお話を聞いて、二次評価はSでも良いのか、委員の皆さんでご意見を述べていただきたいと思います。いかがでしょうか。

本間委員のコメントには、「小学校の授業で見学をし、美術に対する心を育てているのに、中学校に進学してからはそれが続いている」とはどうしてなのでしょうかと、とのコメント

トがあります。この辺りで事務局からお話がありましたら、補足していただけると助かります。

〔事務局・沓沢〕：お話の内容としては、これから説明する④の内容になると思います。簡単に答えますと、中学生については全員参加の取り組みはしていませんが、夏休みに宿題、課題などで美術館を訪れる中学生のために、鑑賞教室という受け入れ態勢をとっていることは申し上げたいと思います。

〔小林委員長〕：横須賀市の小学校は何校あるのでしょうか。

〔事務局 阪元館長〕：46校です。

〔小林委員長〕ここに書いてある46校というのは、横須賀市にある小学校全部が来館しているということで、それは素晴らしいですね。かなり広域的にわたりますので。中学校では特に、学校を訪問していろいろ説明はなさっていますが、来館されるというケースは少ないのですか。

〔事務局・富田〕まず小学校の46校という件に関しましては、小学校6年生、市立の小学校全校の6年生が、学校単位でバスを使って美術館に来館するということが、開館以来の事業、取り組みとなっております。中学校に関しましては、特に学校単位での来館を促すようなかたちはとっておりませんで、個人の来館を促進していくように、夏休みに中学生のための鑑賞教室を行うといった取り組みをいたしております。

〔小林委員長〕：館長が教育委員会の部長ですので、すこし発破をかけていただいて。横須賀市の教育と美術館がより有機的に絡むことの意義は大きいと思いますし、写真でなく本物の絵を鑑賞したりすることは心を育ませるのに大変良いことだと思います。さらなる中学校との連携が可能ならば、ぜひ模索していただきたいと思います。

色々のご意見を伺いましたが、評価はSでよろしいでしょうか、Aでよろしいでしょうか。数的にみるとAが断然多いのですが、いろいろ話を聞いて、私が評価を変えてもいいですというようなお話がありましたら、どうぞ。

特にないようですと、菊池委員、柏木委員のSがありますが、一次評価通りAとさせていただきますが、よろしいでしょうか。

〔菊池委員〕：そうすると、実施目標の方にも、それではどこまでやればSになるのかという問題が出てしまいます。数字の世界で2,700人になって、あきらかにSだけでも、そのような状況のなかで、定性的に実施目標がSになる基準というのは、これだけやって、これ以上何か出来るのでしょうか。

〔小林委員長〕：ある意味で達成目標と実施目標というのは、ひとつの評価として、つなが

りを持っています。私などは、先ほど事務局の沓沢さんからお話いただいたことを踏まえて、学芸員のあり方等々、あるいはボランティアのあり方等々を聞いて、評価をAからSにしてもいいかと、心の中で思っているわけです。積極的にご意見がありましたらどうぞ。

[草川委員]：正直いいまして、SかAというのが判断つかないのです。先ほどの関連事業は、数値的に出るため、明確にわかるのですけれども、こちらのほうだとイメージといたしますか、内容的にも分からない部分で、どこまでがSなのかAなのか、みなさんのご意見を伺うとSでもいいのかな、という感じがしますし、ただ一次評価が先ほど数値の方はSとなっていましたので、私もSと付けましたけれど、これは一次評価がAとなっていたため、それにあわせてAをつけさせていただいた、という状況です。

[丹治委員]：私自身も、本当に草川委員と同じように、イメージでしかとらえることができず、自分のかかわっている小学生の美術鑑賞会については、本当にありがたい、というところがあって、それが同じようにみることができるのかどうか、というのがよくわからないまま、Aにしてしまったところですが、でもこういう点を伺って、聞くところで、十分にSに値するということはよくわかりました。

[祓川委員]：ギャラリートークボランティアの皆さんはとてもやりがいをもって一生懸命やっています。それは内部だけの話で、来館者がどう思っているかという問題がありますね。そちらの方のギャップがまだあるのかなという感じがしまして、私はその一次評価Aというのを見たときに、内部の方たちが、例えばギャラリートークボランティアの教育をもう少しとのご意見がありますが、そのようなアンケートにしたがって、改善の余地があると思われているのかと思ひまして、Aにしました。

[小林委員長]：ますますAにするか、Sにするか、難しくなってきましたね。自己点検自己評価という形で何年間も続けておりますので、美術館側の評価というのはかなりの確に、そして、己を厳しく律している部分が見受けられます。ここは、色々な意見を勘案しまして、委員会としてはSと評価をさせていただくということで、よろしいでしょうか。

(異議なし)

[小林委員長]：それではこちらの評価はSとさせていただきます。引き続き次の③の項目について事務局から説明をお願いします。

[事務局・工藤]：「Ⅱ 美術に対する理解と親しみを深める」「③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす。」についてご説明いたします。

一次評価書の11頁をお開きください。こちらでは達成目標を「企画展の満足度80%以上」としております。平成29年度の企画展満足度が89.5%となりましたので、一次評価の達成目標をAとつけております。参考資料集の24、25頁をお開きいただきますと、各企画展の満足度、要素別の満足度の詳細が表になっております。要素別の満足度を検討しますと、

概ね全ての展覧会が80%を超えていますが、「観覧料」「解説・順路」が80%を下回っており、若干改善が難しいと考えられます。一方、「作品」「配置・見易さ」は概ね高い数値となっております。今回は二次評価をAとつけました。

続きまして、実施目標についてご説明いたします。こちらは、

・幅広い興味に対応するようバランスをとりながら、年間6回（児童生徒造形作品展を含む）の企画展を開催する。

・所蔵品展・谷内六郎展をそれぞれ年間4回、テーマをもたせた特集を組みながら開催する。

・知的好奇心を満たし、美術への理解を深める教育普及事業を企画・実施する。

・美術への興味や関心が深まる美術関連の資料（図書、カタログ等）を、図書室で収集・整理・保管・公開する。

・資料が探しやすく、快適に利用できる図書室環境を維持する。

・主として所蔵作品・資料に関する調査研究を行い、その成果を美術館活動に還元する。

とりわけ平成29年度は、開館10周年にあたりまして、関連する事業としては企画展では「美術でめぐる日本の海」、所蔵品展では会期ごとに特集を組み、コレクションの人気投票を展示に反映させるなどの工夫を行いました。谷内六郎館でも同様に、投票結果を反映させた展示を行っております。ただ、所蔵品展での工夫が満足度にダイレクトに反映しているかということ、そうではないということが結果として読み取れます。ただ、通常の展示の仕方とは異なり、市民の方が参加するという手法、そしてそれを見ていただくという事は10周年の節目としてはふさわしい事業だったと考えております。

教育普及事業につきましても、一覧表のように例年どおり事業を開催してまいりました。これらを受けまして、実施目標をAとつけました。③の説明は以上です。

〔小林委員長〕：いかがでしょうか。菊池委員が「児童生徒造形展が無料なら評価項目に観覧料が入っているのはなぜか」と書いていますね。

〔菊池委員〕：児童生徒造形作品展は無料ですね。24頁の③-a.-2の観覧料、これは100%かと思ったら、94.2%。無料であれば、観覧料が評価に入るのはどうかと。それが気になりました。

〔事務局・沓沢〕：アンケート関係なのでこちらからお答えします。素直に集計した結果であり、コメントには例えば他の展覧会でも「観覧料が安すぎます」などの回答があります。

〔菊池委員〕：この5.8%の人は有料でもいいのでは、ということだと思います。ただ基本無料のものを、観覧料として評価するというのはどうかと思います。他の企画展では7～8割なのに、造形展だけ94.2%と非常に高い。正当な理由で数値を引き上げているなら良いのですが、無料であれば、そもそも観覧料としての評価というのはどうかと思うのです。

〔事務局・沓沢〕：補足させていただきます。評価資料として用いておりますのは、要素別

の満足度の内の「総合」です。総合的にどうだったかというのを伺って、その計算式を用いて当該年度の総合的な満足度を出しております。その中には今ご指摘いただいたような観覧料の評価がそのまま反映されているわけではございません。

〔菊池委員〕：そのようなことであれば、それで結構です。だとするとここは数字として出さなくても、棒線でも良いように思います。特に反映されていないのであれば、数字で出す必要もないと思います。

〔小林委員長〕：柏木委員、草川委員、「解説・順路」等々について触れていますので、草川委員からお願いします。

〔草川委員〕：記載していますとおり、要素別の満足度を見ると、「観覧料」「解説・順路」については低い、けれどもそれを改善する姿も見えます。ただこれには限界がある。それを「作品」「心的充足」の数値でカバーしているので、評価はAでよろしいのではないかと。

〔小林委員長〕：本当はもっと皆さんのご意見も聞きたいところですが、達成目標の二次評価はAということでよろしいでしょうか。

(異議なし)

〔小林委員長〕：次の実施目標に関して、柏木委員は美術館の専門家ですから、そういう観点から感じていることがご意見として出ていると思います。そのコメントも含めてお話いただけますか。

〔柏木委員〕：アンケートについては、母数を上げるために工夫をされていると思いますが、何か特別な取り組みはありますか。

〔事務局・沓沢〕：例年、館内の2か所、本館と谷内六郎館に設置式のアンケートボックスを置いており、ご協力をお願いするというかたちです。特段、それ以上の回収数を多くするという事は正直していません。

〔柏木委員〕：来館者の自主性に任せるということですね。何か工夫をしてみても良いのではないのでしょうか。ボランティアの方たちの協力をいただいて、何か工夫をしてみるなど、検討されてもいいのかなという気がいたします。それと、総入館者数の数値目標があったので、それに則って判断することになるわけですが、例えば「伊藤久三郎展」とか「青山義雄展」などはなかなかの館でやっても入場者数は上がっていかないジャンルであるけれども、この館の特質からいったら、館の姿勢として取り組んでいくべき展覧会だと思いますので、そこは年間の事業のバランス、「tupera tupera 展」で入館者数を得ているということを考え合わせて、こういう展覧会に果敢に取り組んでいただきたいと思います。

〔小林委員長〕：大変貴重な意見かと思えます。そういうことを踏まえまして、二次評価につきましてはみなさんAとなっておりますので、実施目標の二次評価はAとしたいと思えます。

（異議なし）

〔小林委員長〕：③の項目については達成目標A、実施目標Aということにいたします。それから図書室の利用率というのは高いのですか。例えば美術のことなら、横須賀市中央図書館に行かなくてもこの美術館図書室には、それくらい美術書は充実しているのでしょうか。本間委員のご意見もあります。

〔事務局・工藤〕：参考資料集の50頁をご覧くださいますと、平成29年度の実績が載っております。図書室の利用者数は合計で15,135名。（美術館に来館した）1割以上の方、あるいは展覧会を見ずに図書室だけ利用されるという方もいらっしゃるかもしれませんが、これだけの人数が利用されています。

〔小林委員長〕：付属の図書室としては、なかなか良い実績が上がっていますね。わかりました。

〔菊池委員〕：確認で、先程の話にあったアンケートの「総合」というのは、児童生徒造形作品展についてですが、③-a.-2の「総合」で出している、という意味で良いのですか。

〔事務局・沓沢〕：アンケート用紙には、6つの質問があります、最後に「全体的にみてどうでしたか」という評価があります。それまでの5つは私共の参考のためでありまして、評価資料としては、総合的にみてどうでしたか、ということのみを抽出しています。

〔菊池委員〕：この「総合」の数値とは違うということですか。

〔事務局・沓沢〕：おっしゃるとおりです。要素別にきいたことを総合的に入れ込んでいるわけではありません。

〔小林委員長〕：よろしいですか。では、④の項目「子どもたちへの美術館教育を推進する」につきまして、事務局から説明をお願いします。

〔事務局・富田〕：16頁をご覧ください。「④学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する」について説明します。達成目標の「中学生以下の年間観覧者数22,000人」に対し、平成29年度は27,345人と、目標値の約120%にあたる数値を達成しましたので、評価をSとしました。

展覧会別で見ますと、秋に実施した「ぼくとわたしとみんなの tupera tupera 絵本の世

界展」が中学生以下の観覧者数の伸びに決定的な影響を与えたことがわかります。この展覧会は、合計で46,000人を超える観覧者を得ることができ、特に、幼児を含む家族層の観覧が目立っていました。一年間に訪れた幼児の8割以上が、「tupera tupera 展」の会期と重なる9月から11月に集中しています。このような幼児を含む若年家族層の増加は、新たな観客層の開拓につながるものとして評価できると考えます。ただ一方で、中学生の観覧者数は低い水準にとどまり、柏木委員のご指摘にもあるとおり、中学生という多忙な時期の子どもたちに何をどうアピールすれば、来館につながるのか、また、年齢による嗜好の細分化に美術館がどこまで対応できるか等、今後の課題も残ったと認識しています。

なお、展覧会事業以外については、数字には表れておりませんが、子ども向けワークショップ、映画会、家族向けのギャラリートツアーなど、子どもとその家族を対象としたプログラムを例年とほぼ同程度の回数で実施しました。参加者についても、昨年と同程度、あるいは事業によっては大幅に増加いたしましたので、こちらも比較的好調だったと捉えています。

続いて、実施目標について申し上げます。実施目標は、17頁最後から18頁にかけて、

- ・学校における造形教育の発表の場として、児童生徒造形作品展を実施する。
- ・学校および関係機関と緊密に連携し、子どもたちにとって親しみやすい鑑賞の場をつくる。
- ・子どもたちとのコミュニケーションを通じて、美術の意味や価値、美術館の役割などに気づき、考え、楽しみながら学ぶ機会を提供する。
- ・鑑賞と表現の両方を結びつけたプログラムを実施する。
- ・小学校鑑賞会を充実させるため学校との連携を強化する。
- ・美術館を活用した鑑賞教育が一層充実するよう、アートカードの活用促進をはじめ教員の授業作りに有益な情報提供を積極的に行う。

という6つの項目を箇条書きで記載いたしました。これらについて、計画通り事業を実施しましたので、一次評価をAといたしました。実施した事業の詳細と、個々の評価については、18頁後段から19頁にかけて、[一次評価の理由]に記載しました。

特に申し上げることとしては、平成29年度の新規事業としてスタートさせた、先生を対象とする美術館活用講座があります。市内の先生と良好な関係を築くことは、小学校鑑賞会の質を上げていくという意味でも、また、児童生徒造形作品展を盛り上げていくという意味でも、非常に重要であると考えており、その底上げという趣旨で始めた事業です。しかし、平成29年度は、参加者の合計が28名、うち市外からの参加が11名と、数的に見ると大きな成果をあげたとはいいがたく、今後も努力が必要な領域であると認識しています。

これ以外にも次年度への課題と捉えている事項を、19頁後段にまとめましたので、お目通しいただければと思います。④については、以上です。

[小林委員長]:説明についてのご質問はございませんか。では評価に入りたいと思います。中学生以下の年間観覧者数22,000人という、これに関しましては、皆さん一次評価どおりSをつけておられます。柏木委員だけがAですが、「来館を促すための事業計画全体の工夫を期待してAとした」とありまして、記述内容から見て、気持ちはSだろうと読み取りま

した。達成目標について、ここには記載しなかったご意見がありましたらどうぞ発言してください。よろしいでしょうか。二次評価は一次評価同様、Sといたします。

(異議なし)

〔小林委員長〕：次の実施目標ですが、色々なご意見があります。菊池委員はSを付けた理由として、アートカードのことなどを非常に評価されていますが、補足がありましたらお願いします。

〔菊池委員〕：直接、学芸員の方が先生と接触をして、色々話してやることができれば、なおよろしいのですが、学芸員の数も限られる中で、どうやって学校現場の先生方に芸術の普及、子どもたちへの普及の活動をしてもらうかと考えたときに、アートカードのような媒体を通して、できるだけ多くそういう機会を作るということで、しかもこの美術館の場合、それが非常に有効に活用されているのではないかとということで、Sにしました。

〔小林委員長〕：アートカードを使った形で、やっておられる美術館というのは多いのですか。それともここが特にユニークな形でやっているのですか。

〔事務局・富田〕アートカードを作っている美術館というのは、当館に限らず、実際には多くあると思います。当館の場合は、市内、市立の全小中学校に配備されているということ、他都市からもご要望があれば、貸し出しをしているということなどが特徴的で、当館が積極的に活用している部分と思います。

〔小林委員長〕：そういう意味では、表には出ませんが、美術館の果たしている役割というのは非常に大きいと思いますし、評価できる要因だと思いますので、今後もぜひよろしくをお願いします。柏木委員がAからSに変わっておりますが、コメントをいただければ。

〔柏木委員〕：高齢化の中で、子どもというのは将来、美術館の大切なファンとなってくれます。子どもを誘客するというのは、どこの美術館でも必須だと思います。その意味で、実施目標には本当に大事なことばかり掲げてあって、それに対しては真摯な取り組みをなさっている。それから課題の分析もしっかりなさっている。特に、非収益事業について、費用対効果の面で、いろいろ苦慮するところがあるわけですが、美術館の活動の中で、非収益的な、社会教育的な部分というのは重要であって、そこに資金投下しなければならぬ部分もありますので、そういったことに対する認識ということもしっかりと書かれてあり、その分析や課題ですね、そのようなこともきちんと読み取れるということの評価したいと思います。

〔小林委員長〕：はい。それでは丹治委員、教育の現場からコメントして下さったわけですが、これに対する補足をぜひよろしくをお願いします。

〔丹治委員〕：現場のことを十分にご理解いただきながら、よい企画をしようと努力していただきながらの達成目標であり、実施目標であり、何か問い合わせをすれば、すぐに答えていただけるというような美術館で、本当にありがたいと思っております。ここに書かせていただいたことは、本当にこのとおりのことであって、小学生、中学生が自主的に足を運ぶときには、「あ、知っている」、それから鑑賞会から帰ってきたときに、そこで見た作品が教科書に載っていたとか、そういうことが次への動機づけにつながるのかなということで、教師としての思いをお願いということで、ここに書かせていただきました。

〔小林委員長〕：委員会の評価としましては、二次評価は、一次評価どおりAということで、いかがでしょうか。

（異議なし）

〔小林委員長〕：ここで丹治委員が書かれたことは、教育現場からの一つのご意見ということで、学芸員や美術館にとっては貴重な意見であります。ここに接近できれば、子どもたちへのより良い美術館教育というものが達成されていくということで、このコメントを大事にさせていただきたいと思えます。評価としましては、達成目標はS、実施目標はAということにさせていただきます。

次に「⑤所蔵作品を充実させ、適切に管理する」について、事務局から説明をお願いします。

〔事務局・沓沢〕：21頁をご覧ください。「⑤所蔵作品を充実させ、適切に管理する。」について、説明いたします。この項目は、美術品の収集・保存・管理等に関する項目です。数値目標が立てにくいなか、達成目標は、環境調査を実施する回数2回、美術品評価委員会を開催する回数2回としております。いずれも、目標の回数を実施しておりますため、一次評価はAといたしました。

草川委員から、環境調査の適切な回数についてのコメントをいただきました。環境調査は昆虫類、菌類、気相（空気の様子）について行っておりますが、特に昆虫類については、活動が活発となる春、夏の時期に行うことが有効とされておりますので、年2回行っています。

次に実施目標は、作品の収集活動、保管環境、修復・額装、作品の貸し出しについて、それぞれ望ましい姿を掲げています。おおむね目標どおりの活動ができております。しかし、収集活動に関して、29年度はいまだ作品購入費の充当がされていない状況でありましたので、一次評価はCといたしました。すでにこの委員会でも報告いたしましたように、現在、購入活動の再開が可能となるように、内部で検討を進めているところです。その結果につきましては、適切な時期に報告できるものと考えております。⑤についての説明は以上です。

〔小林委員長〕：説明に対してご質問ございますか。よろしいですか。では、⑤の達成目標

について検討したいと思います。草川委員からコメントをいただいていますので、お話しただけですか。よろしくお願いします。

〔草川委員〕：ただ今ご説明いただきました環境調査は年2回、梅雨時期と夏場の虫関係ということですね。2回というのは分かりましたが、冬はやらなくても大丈夫ですか。

〔事務局・沓沢〕：いま3つの大きな区分けでご説明しました。主に春、夏である必要があるというのは、そのうち昆虫類についてです。菌類とか、気相に関しましては、もちろん年間を通じて調査できればいいのですけれども、やはり最低限、必要十分な回数ということで、その春、夏の2回ということにしています。

〔草川委員〕：30年度も環境調査は年2回、あと美術品評価委員会ですか。これは年1回という「決め」がございましたら、評価の判断といたしますか、どうすればSになるのか、環境調査が年1回だったらBなのかCなのか。これは2回するという、目標より「決め」に近いと思います。

〔事務局・沓沢〕：この達成目標については、この委員会の歴史的といたしますか、回数を重ねる中で編み出されてきた目標というようなこともありまして、過去の議論では、ここは例えば、達成目標を設定しないという時期もありました。その中で、なにか数字を出せることはないかということで、委員の中からご意見をいただいて導入した経緯がございます。

環境調査はいま年2回実施できていますけれども、財政上の理由等で1回にしないということがありましたら、それはまた運営の変化として捉えていくべきことだとは思いますが、そのような可能性もあろうかと思えます。

逆に美術品評価委員会は、例えば、ものすごく収蔵すべき作品が多くなって1回ではできないことであれば、年度途中にもう1回開催して年2回開催するということが過去にもございますし、今後も状況の変化によって回数の増加はあると思っております。そういった意味で、1回、2回という数字ではありますけれども、数値目標として挙げさせていただいています。

〔小林委員長〕：よろしいでしょうか。他の委員の方、何かコメントございますか。あるいはご意見ございますか。

ご意見がないようでしたら、その達成目標は、皆さま方が評価してくださっているように、二次評価はAとさせていただきますが、よろしいでしょうか。

(異議なし)

〔小林委員長〕：次の実施目標ですが、皆さん同様にCとなっています。これは横須賀美術館の運営そのものがかなり厳しい状況にあるということが前提になっていると思うのです。柏木委員は横浜美術館の副館長ですので、ご意見をいただきたいのですが、よろしくお願いします。

いします。

〔柏木委員〕：今回、「次年度への課題」の最初の項目のところに注目をしています。この部分に記されていること、市議会における指摘とか質疑であるとかということについて、可能であれば情報をまとめて示していただけるとありがたいと思います。

例年申し上げているとおり、美術品購入のための基金を充当していくことに対して、館単体での活動ではとても無理で、予算を編成する部局と議会の理解なくしてはできません。ただ、購入を含めて美術館は収集活動をやめてしまうと、美術館としての活動が滞ってしまいます。

寄贈があれば良いということではなくて、購入をするということによってさまざまな美術品の情報が市場から入ってきます。それが途絶えているのが一番良くないので、少額でも良いので作品購入できるような道筋をつけていくことが必要であるということはずっと毎年言っているわけです。今回この「次年度への課題」というところで、議会での議論があったということが書かれているので、その辺りの情報が、もう少し開示できることがあるのであれば、今回でなくても良いですけれども、お示しいただければと感じました。

〔小林委員長〕：これは本当に大変な問題であって、中核市横須賀としては、もっともっと、美術館に力を入れても、本来なら良いのしょうけれども、美術館が建ったときから半分遠慮しているようななかで成立してきたような部分もあって、ある意味では学芸員あるいは実際に美術館を運営している運営課の皆さん方のご苦労が大変多いと思うのです。ですが、やはり40万都市として、ここで美術館活動をやるならば、やはり柏木委員がお話してくださったような問題というのは大変必要だと思います。美術館の側から見ると、遠慮してできるだけこの問題は触れないでおきたい部分があるのではと思います。

市会議員の方も、私が知っている何人かもそうですが、視察で長野や他市の美術館を見学に行ったりして、見てきたデータをきちっと美術館に反映させていただきたいと思います。けっこう美術館を視察に行っているのですが、そのような情報が入ってこないですね。いろいろ地域によって美術館も工夫しているのです。甲府美術館は、所蔵作品というお宝ひとつで、サクランボだ、ブドウだ、という、必ずバスは美術館を寄るようになっているぐらいの調子です。

やはり作品というのは大変重要な問題ですし、市議会、行政への問題提起というのは難しいでしょうけれども、やはり今横須賀美術館にとって、美術館の持つ問題とか美術館のあることの意味というのは、一方ではきちっと位置づけていくことも必要かと思います。

私自身が評価委員になっているからというわけではなくて、都市というのは、そうした図書館があり、美術館があり、博物館があって、市民活動がスムーズに展開するものだと思います。いつもこの評価の背後には、そういう問題が語られていますけれども、ぜひ取り組んでいただければと思います。いまの実情のなかでは、みなさんC評価をしていますけれども、致し方ないなということで、一次評価でなされているとおり、この委員会でもCという評価をさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(異議なし)

[小林委員長]：次に⑥項目、利用者にとって心地よい空間・サービスを提供するについて説明を願えますか。

[事務局・高橋]：「⑥利用者にとって心地よい空間・サービスを提供する。」について説明いたします。一次評価報告書 22 頁、二次評価まとめ 6 頁をお開きください。

達成目標ですが、館内アメニティ満足度 90%以上、スタッフ対応の満足度 80%以上という目標に対し、22 頁にございますとおり、29 年度はそれぞれ 92.8%、86.8%と目標を達成しましたので、A評価といたしました。27 年度以来、館内アメニティ満足度・スタッフ対応の満足度ともに目標値を達成し、27 年度・28 年度の二次評価ではS評価を頂戴しましたが、館内アメニティ満足度が 92.8%という結果でしたので、今年度もA評価にしました。

次に、実施目標について、一次評価はAとしました。評価の理由として、23 頁に記載しました 3 つの目標に対して、23 頁中段から 24 頁まで、29 年度に実施した内容を掲載しております。

実施内容をいくつか紹介いたしますと、23 頁中段のメンテナンスに記載しましたように、本館のガラス屋根や谷内館出入口の建具が経年劣化したため補修を行いました。また、非常電源用の装置や、空調関連設備にも経年劣化が見られたために修理を行いました。

次に、受付・展示監視についてですが、平成 26 年 10 月に現在の事業者が業務を開始して以来、達成目標にもありましたとおり、スタッフ対応の満足度を高水準で維持しています。これは、受託事業者の努力がよるものが大きく、あわせて、スタッフと事務局で課題等の情報共有を行うことで、日々、改善がなされているためと考えます。

次に 24 頁中ほどの「ミュージアムショップ」につきましても、平成 29 年 1 月に事業者が交代し、従来水準以上を目指して事業者と協力しております。本間委員の二次評価やこれまでの委員会での指摘にあるように、改善に向けて、事業者とともに一層の努力を重ねてまいります。

[小林委員長]：草川委員にお聞きしますが、委員としてではなく観音崎ホテルの社長としてS評価をしている理由をお聞きしたいのですが。

[草川委員]：ホテル関係の仕事をしていると、そのような目でそれぞれの施設を見てしまいます。その中で、当館はアメニティもスタッフ対応も満足度を達成しており、以前話をしたとおり、観音崎ホテルより素晴らしいと思いましたのでS評価を付けました。実施目標も達成していますし、アンケート結果も踏まえてS評価を付けました。当然お客様の視点でも同じように感じられて、評価も良いということで、実施目標もS評価を付けました。実際、施設は塩害や 10 年を超えて老朽化が出ていると思いますが、その中でメンテナンスをされていますし、レストランの事業者様に対してですが、素晴らしいサービスをされていますので、十分S評価に値すると思います。

〔小林委員長〕：プロフェッショナルからのご意見で非常に評価されているということです。菊池委員から前年度Sの水準を超えているのに、A評価をした理由はというご意見についてお話をお願いいたします。

〔菊池委員〕：書いてある通りですが、前年Sの水準を超えているのに、A評価をした理由は、例えば前年よりも明らかにサンプル数が少なかったなどの要因があれば別ですが、そうでない中で、おそらく遠慮でないかと思います。ですので、前年度のS評価を超えている数字であれば、今年度も高水準であるということで、S評価で良いと思います。

〔小林委員長〕：他のA評価を付けている委員さんでコメントがあればどうぞ。AとSの数と比べると、Aの方が多いですが、柏木委員のコメントを見るとS評価に近いA評価ということで、二次評価はSということよろしいでしょうか。

(異議なし)

〔小林委員長〕：委員会としてS評価とさせていただきます。次に実施目標ですが、柏木委員、清掃作業の人員配置について、補足をお願いいたします。

〔柏木委員〕：館によって色々事情があると思います。清掃委託をされていると思いますが、人員が必ずしも十分でないと感じ評価されていますが、その原因は何かお聞きしたいのと、開館10周年が過ぎ、経年劣化もある中で、様々な修繕が突発的に起こると思います。修繕の予算が館の予算の枠の中でどこまでやって、それを超えるものはどうされているのかを教えてください。

〔事務局 高橋〕：清掃については23頁の清掃のところにも書いてあるとおり、開館前には全てきれいにしなくてはならないので、3～4人を派遣していただいています。人数については委託条件の中で特に人数の指定まではしていませんが、例えば一度に10人入れて短時間で行い、次の現場に行くのも良いですし、指定された場所を時間内に清掃するようお願いしています。日中については開館前に一度清掃していますので、追加でトイレなどの汚れる部分を重点的に1人で清掃している状況です。人数が不足しているときは、日中の10時から18時まで、突発的にトイレが汚れていたりして清掃員が別の現場で作業をしている時に、巡回等で何かあればすぐに対応するような処置をとったり、職員や展示監視の委託業者で適切に対応していきたいと思います。お客様になるべく不快感を与えないよう対応しています。可能であれば、清掃員を1人でなく2人3人と増やしても良いと思いますが、どうしても予算という問題があります。修繕に関しては、劣化が進んでいますので、計画的に行うよう努めています。空調機などは3年計画で業者からの提案を踏まえて行っています。修繕の費用が足りない場合は、流用対応をしています。今のところ補正予算をとるような、大掛かりに壊れることはなく、予算が足りなければ、例えば修繕料に余裕がない場合は電気代など他から持ってくることで対応しています。

〔小林委員長〕：実施評価についてですが、S評価ということも考えられると思いますが、草川委員を除く委員がA評価をしておりますので、達成目標と実施目標に違いがありますが、実施目標はAとします。そのAの評価ですが、中身が良くて、皆さんの反応はSだったという理解、Sに近いA評価としますがよろしいでしょうか。⑥については達成目標がS、実施目標はAとさせていただきます。

次に、「⑦すべての人にとって利用しやすい環境を整える」について説明を願えますか。

〔事務局・富田〕：一次評価書の25頁をご覧ください。「⑦すべての人にとって利用しやすい環境を整える」について説明いたします。横須賀美術館では、開館以来、障害のある方と美術の接点について考えるための活動を続けております。この項目では、障害者に関連する事業の他、未就学児に向けた事業なども含めた福祉関連事業について評価しています。

達成目標である「福祉関連事業への参加者数のべ420人以上」に対し、平成29年度の実績は435人となり、目標を達成しましたので一次評価をAとしました。

事業別に見ますと、講演会、ワークショップ、パフォーマンスの参加者数は、柏木委員のご指摘にもありますとおり、やや低めの水準にとどまりました。しかし内容を見ますと、狙いを明確にしたことで内容に合った参加者を得ることができたと現場では考えております。また、みんなのアトリエや、県内近隣美術館との連携事業であるMALPAのフォーラムについては、広報を工夫するなどして一定の参加者を得ることができました。

実施目標につきましては、26頁に記載のあるとおり、

- ・年齢や障害の有無などにかかわらず、美術に親しんでもらうための各種事業を行うこと
- ・必要に応じて、対話観賞等の人的サポートを実践すること
- ・託児サービスを積極的に周知していくこと

の3項目を挙げております。29年度も、ここにあげた各種の事業に積極的に取り組んできたことから、一次評価はAといたしました。詳しくは、26頁から27頁にかけての「一次評価の理由」の部分をご覧ください。

また、ここでは特に記載しませんが、小林委員長からご指摘のあった「福祉対象化の概念の拡大」に対しても、できる範囲で取り組みを進めております。具体的には、養護学校や特別支援学校だけでなく、高齢の方や障害をお持ちの方が、利用施設単位で団体観覧を希望される際に、それぞれ適切な対応ができるよう、申し込みを受けた時点で聞き取りを行いニーズの把握に努めています。また、目録の文字が小さい場合などは、担当学芸員の判断で拡大版の目録を用意することとしています。

なお、27頁の後段には、次年度への課題をあげましたのでお目通しください。特に、ワークショップ等に、障害当事者の方の参加を得るための工夫については、今後、重点的に取り組んでいくべき課題と認識しております。平成30年度に重点的に取り組みを進めていきたいと考えております。⑦についての説明は以上です。

〔小林委員長〕：ご質問ありますか。確かに高齢化が進んできたことで、福祉のあり方というのは変わってきていますね。歳を重ねていくと難聴になったり、なかなかアナウンスが

通じなかったりする。そのようなことで取り組みが難しくなっていると思いますけれども、この美術館のアメニティ度を高くするという意味でも、福祉の概念を少し拡大して考えていただければと、問題提起をさせていただきました。ここは皆さんが書いておられるとおり、評価はAということでよろしいでしょうか。

(異議なし)

〔小林委員長〕：次の実施目標について、丹治委員から補足がありましたらお願いします。

〔丹治委員〕 ボランティアのところで、「みんなのアトリエ」の参加者が少なかったため、ボランティアをお断りしたということがあったかと思うのですが、参加者数に関わりなく、こういった企画を続けていただきたいという思いで書かせていただきました。

〔小林委員長〕：柏木委員からも補足をお願いしたいのですが。

〔柏木委員〕：数值的に、福祉関連のワークショップの数値が低いように見えるのですが、ここは説明があったように、次年度への課題として認識されていますので、そこを意識して計画をなされたら良いのではないかと思います。

〔小林委員長〕：他に何かありませんか、どうぞ遠慮なく。

〔祓川委員〕：「みんなのアトリエ」には、かなり重度の障害をお持ちのお子さんも参加しています。その日の体調で、来られるか来られないかわからない、でも、「子どもが喜ぶから、体調が悪くても来たのよ」とおっしゃる方もいたり、先生の対応も素晴らしくて、学芸員の努力もすごいなど。ですから、このような事業がやはり続けてくれたら良いなということを書きました。

〔小林委員長〕：この実施目標の評価については、委員の皆さん方の評価を受け入れまして、Aということでよろしいですか。

(異議なし)

〔小林委員長〕：⑦については、達成目標A、実施目標Aということにさせていただきます。

最後になりますが、「⑧事業の質を担保しながら、経営的視点をもって効率的に運営管理する」について、事務局よろしくをお願いします。

〔事務局 秋山〕：「⑧事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する」の一次評価について、説明いたします。評価報告書の28頁、二次評価まとめ8頁をご覧ください。

達成目標についてですが、平成 29 年度の達成目標は、「電気・水道・事務用紙などの使用量を直近 3 年間の平均値を目安とする」でした。

頁中段の表にありますように、電気使用量は目標値を若干超えましたが、平成 26 年や 27 年を下回っています。一方、水道使用量と事務用紙使用枚数については目標数値を超過しました。水道使用量が平均値をやや上回り、事務用紙使用枚数が平均値をかなり上回ったので、一次評価は B としました。

目標数値を上回った理由としましては、観覧者の増加によって、手洗い場の利用や、レストランの水道使用量が増加した事と、イベントのために使用した用紙が大幅に増加した事によると考えています。

実施目標「職員全てが費用対効果を常に意識し、事業に取り組む」につきましては、実施目標の一次評価は A としました。理由としましては、予算の執行において、経費節約ができないか仕様書を見直し、また、出張経路を最短になるように工夫するなど、業務の質を落とさない範囲で経費削減にも努めており、職員のコスト意識が高く保たれていると感じているためです。⑧の説明は以上です。

[小林委員長]：この件についていかがでしょうか。菊池委員は A 評価をつけていますが、コメントをください。

[菊池委員]：来館者が増えれば水道使用量も増え、イベントが増えれば事務用紙使用枚数も増えるので、無駄があったかなかったかが重要であると思います。一つの目安として、無駄がなく、全員が意識をして、来館者数などを加味して、想定した範囲内であれば A 評価とします。少し乱暴な言い方かもしれませんが、この評価に関して言えば、S 評価はあり得ないと思います。できていれば A 評価で、無駄があれば B 評価という判断をしていかないと、追求していくと館の運営に影響すると思います。私としては 10 周年の計画で 18,000 人増え、イベントも増え、参加した人数も増えたのであれば、今回は無駄がない範囲ではないかと思います。

[小林委員長]：菊池委員のおっしゃったとおりだと思います。今年は早くから真夏日ですので、28℃に設定したとしても、28℃に維持するにはいつもよりも電気代がかさんでくるということもあります、イベントによっても水が多く使われる状況もありますので、やはり無駄があったかないか判断するようにしないと評価だけが独り歩きしてしまうということが一番恐ろしいと思います。ですので、評価のあり方、一次評価を積極的に覆す理由がないと覆せませんので、評価の基準をどうするか、特に無駄がないのであれば、昨年と今年の天気や来館者数の状況を踏まえて評価すべきだと思います。ただ前年度の数字を上回ったか下回ったかではない評価を構築する必要があると思います。そうでないと、真夏日が続いたりすると苦しくなってしまうので、お考えいただければと思います。努力されているとは思いますが、私も B 評価をつけていますが、A 評価をつけている丹治委員ご意見があればどうぞ。

〔丹治委員〕：この10年どのようなところでもスリム化をしていくことを目標にし、取り組んでいます。学校も同様です。美術館も年々取り組んでいる中での状況だと思いましたが、一次評価の(1)(2)の文を読んだときに、これなら十分でないかと思い、A評価としました。その判断、どこを基準にするかは皆様に合わせます。

〔小林委員長〕：達成目標のところ、直近3年間の平均値を目安とするというところが、非常に引っかかってきます。この表現が変わらない限りB評価にならざるを得ないと思います。一生懸命努力されても、評価基準、達成目標のあり方に工夫がないと、実情に即した適切な評価が得られないのではないかと思います。とりあえず今回はB評価にいたしますが、今の状態では、努力しても報われないこととなりますので、次の評価の時にこの位置づけをお考えください。よろしいでしょうか。

〔菊池委員〕：もう少し言わせていただくと、例えば実施目標の中でB評価があれば、コストに対する意識が軽薄になっていることとなります。実施目標の中で、F評価で評価できないという方もいらっしゃると思いますが、皆さんA評価をつけている中でこの数値が出ているということは、意識としては劣っていないと思います。実施目標がB評価とされたときに達成目標をどう変えるかという問題がありますが、無駄がないようにという、曖昧な評価を達成目標にしてしまうと、また難しいこととなります。あくまでも目安とする、来館者数や異常気象などの緩衝体を持たせ、どう評価するか。それを踏まえれば、3年間の平均値よりも下がっていてもA評価であると評価できるように目安という表現にしたのだと思います。ですので、見直していかないと酷です。18%人数が増えるならば、必然的に水道使用量も紙の使用枚数も空調にも影響が出てきます。その緩衝を数値の中でどう評価するかと思います。

〔小林委員長〕：1年間の評価ですので、目標を立て、達成目標と異なる結果の項目をきちんと評価出来るかだと思います。費用対効果を常に意識して取り組んでいるのに結果が悪いということになりかねない。厳しく見ている人には独り歩きしていくので。今回は実施目標が皆さんA評価です。本間委員はF評価で、今度お話を聞かないといけません。記載の方法、目標の立て方について、菊池委員がおっしゃるように、課題が残っていることを踏まえまして、次回は考慮した形でご検討いただきたいと思います。今回はB評価とA評価と難しい評価になりますが、A評価でよろしいでしょうか。

〔柏木委員〕：よろしいと思います。目安とするという表現に含みを持たせているということをお勘案すべきだろうと思います。ここの評価はすべきでないと思いますし、ただ直近3か年の平均値に何か意味があるのかというのは疑問に思いますが、数値的には目安ですので、実施目標の枠の中にある程度いれば、8番の目標についてはA評価としても良いと思います。

〔小林委員長〕：目標についてはこのようなご意見が出ましたがいかがですか。昨年度に比

べると観覧者数がかなり増えていきますので、エレベーターにかかる電気代、室温を保つにも例年の状況とは変わってくると思います。A評価として良いのではないかと柏木委員からの提案ですが、いかがでしょうか。

〔草川委員〕：私も同じ意見です。目標値からすればB評価ですが、様々な要因がありますので、年度ごとに考えていただく。逆にお聞きしたいのは、来館者数が増えたことによりコピー代などが増え、達成目標の一次評価をB評価とされていますが、館としてこのような結果を職員全員が見直すということは実施されているので、実施目標をA評価とされていると思います。これだと矛盾があるような気がします。事実かもしれませんが、その代わりにどのようなことをして無駄を省いているのか教えていただきたい。実施目標も考えてA評価で良いのではないかと思います。

〔小林委員長〕：説明文として、直近三か年の平均値を目安とするとなっていますが、記載の仕方を考えていく必要があります。費用対効果を常に意識している方は、達成目標とこの問題が結びついてくると思います。今積極的にBがA評価にという話も出てきましたので、委員会としてはA評価でよろしいでしょうか。

(異議なし)

〔小林委員長〕：⑧は、達成目標A、実施目標Aとします。

議事を進めます。「議事(2)平成30年度の事業計画書について」、事務局は資料の確認及び説明をお願いします。

〔事務局・菅野課長〕：今回様々のご意見の中で、評価基準についてご意見をいただきました。これについてはご意見を参考に、次回以降の評価が行いやすいよう見直しを考えたいと思います。また、本日の内容を評価報告書に加えまして、出来上がり次第、各委員に送付させていただきます。皆様には、最終のご確認をいただき、修正等ございましたら、朱書き等訂正によりご返送いただきますようお願いいたします。その後は、委員長一任として完成としたいと考えます。

続きまして、平成30年度事業計画書について、説明をさせていただきます。本年3月に開催した本委員会でご意見をいただき、事務局で再度検討、修正し、完成したものが、本日配布させていただきました、資料2「平成30年度事業計画書」となっております。修正いたしました事項を中心に、事務局から説明させていただきます。①から⑧まで通して説明いたします。

【議事(2)平成30年度の事業計画書について】

〔事務局・相良〕：事業計画書の2頁をご覧ください。「I 美術を通じた交流を促進する」のうち、「①広く認知され、多くの人にとって横須賀を訪れる契機となる」の事業計画につきましては、変更はございません。

次に3頁をご覧ください。達成目標につきましては記載のとおり年間観覧者数10万人以上を目標として設定しております。変更点としましては、3頁の下段の達成状況の表中で、30年1月末の数字を3月末の数字に変更しました。

次に4頁をお開きください。実施目標につきましては変更なく5つの項目を設定しています。目標設定は記載のとおりでございます。説明は以上です。

〔事務局・沓沢〕：事業計画書の5頁をご覧ください。「②市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。」につきましては、6頁の表で、29年度の活動実績を3月末までの数値に書き改めましたほかは、変更はありません。達成目標は、「市民ボランティアの活動者数および協働事業への参加者数延べ2,400人」としております。

7頁をご覧ください。実施目標は、

- ・市民が美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる。
- ・市民ボランティアが、やりがいを持っていきいきと活動できる場を提供する。

と設定しております。②については以上です。

〔事務局・工藤〕：8頁をご覧ください。「Ⅱ 美術に対する理解と親しみを深める」「③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす。」についてご説明いたします。

事業計画は特に変更はございません。9、10頁をご覧ください。達成目標は企画展の満足度80%以上、こちらも変更はございません。前回の委員会で、ここ数年80%を超えていることから、この数値を見直す、もっと高い数値を目指してはどうかというご意見をいただいております。まだ様々検討しなければならないことがございますので、今回は前回のまま80%以上となっております。また、平成29年度の企画展満足度を3月末の数値である89.6%にあらためております。実施目標についても前回と同様です。以上です。

〔事務局・富田〕：12頁をご覧ください。「④学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する」について説明いたします。事業計画については、3月に提出した資料から変更はありません。次に13頁の達成目標について、「中学生以下の年間観覧者22,000人」から変更はありません。なお、13頁中段の表の実績値については、平成29年度の数値を3月末のものに更新しております。13頁後段にあります実施目標についても、前回の資料から変更はございません。④については、以上です。

〔事務局・沓沢〕：15頁をご覧ください。「⑤所蔵作品を充実させ、適切に管理する」項目です。こちらについては、特に変更はございません。以上です。

〔事務局・高橋〕：⑥についてですが、18頁上段の表の、平成29年度の数値を最終数値に修正した他には、基本的に前回お示ししたのから変更はございませんが、二次評価で指摘がありました、ミュージアムショップの満足度を含め、利用者の満足度を高めるため受託事業者と一層の連携を図ってまいります。

また、開館から10年以上が経過し、施設の経年劣化もかなり進行しておりますので、修

繕等を適切に、計画的に行なってまいります。⑥については以上です。

[事務局・富田]：「⑦すべての人にとって利用しやすい環境を整える」の事業計画についてご説明いたします。19 頁をご覧ください。事業計画については、1 か所変更部分がございます。1 から 6 まであげた事業計画のうち、6. 託児サービスの実施について、これは前回、利用者数 20 人という目標値をあげていた部分ですが、これについては前回会議で委員の方から託児の利用者数の多い少ないは、⑦の目標の達成度合いと直接関係ないのではないかとご指摘いただきました。課内で検討しました結果、ご指摘どおり託児の利用者数は目標値に含めず、託児についてはあくまで「実施」として目標に盛り込むということで課内の結論を出しました。ですので、6 については数値目標ではなく「実施」という表現に改めております。従いまして、19 頁以降の達成目標の数字にそのことが反映され変更されております。達成目標については、前回計上しておりました託児の分を減らし、「福祉関連事業への参加者数延べ 360 人以上」に変更しております。また、この表に関して平成 29 年度の実績値を 3 月末の数値に更新しました。実施目標について基本的な内容に変更はございませんが、託児の件に関して先ほどの議論、つまり託児の人数を数値目標に含めないこととした理由について説明を記載してございますので、後ほどお読みいただければと思います。⑦については以上でございます。

[事務局・秋山]：21 頁をご覧ください。「⑧事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する」の事業計画について説明いたします。

表の中の 29 年度の数値を年度末のものに修正しました。修正は以上です。引き続き、職員やスタッフ間でコスト意識を保ちながら事業を進めてまいります。⑧の説明は以上です。

[小林委員長]：①から⑧の項目について説明いただきましたが質問はありますか。事業の質に関する 8 項目の達成目標等の記載の仕方については工夫を、よろしくお願ひいたします。特に質問はないので、次の「3 その他（1）今後のスケジュールについて」事務局から説明をお願いします。

[事務局・秋山]：「資料 3 今後のスケジュール」をご覧ください。本日ご議論いただきました評価結果を基に評価報告書を作成し、委員の皆様へ送付の上、ご確認いただく予定です。その後、教育委員会への報告を経て公開の運びとなります。

その後は例年同様、中間報告から事業計画へという流れで進めてまいります。今後のスケジュールについては以上です。

[小林委員長]：今後の予定について何かご質問ありませんか。特にないようですね。本日、予定されていた案件は以上です。事務局へお返しします。よろしくお願ひします。

[事務局・高橋]：以上をもちまして会議は終了となります。